

水や空

2015・6・1

落語家が高座を下りる時の決まり文句「お後がよろしいようで」。野暮を承知で回りくどく直訳するなら「次の演者の準備ができたようです」。つ

まり、ここまででは私が責任を持って、しっかりと役目を務めてきましたーの意▲柳家喬太郎、柳家三三、柳家喜多八：当代きつての実力派がそろった落語会が先日、佐世保市で開かれた。会のもう一つの主役は、前座を務めた10人の小中学生▲地元の歴史や方言を達者に交えた創作落語を見事に披露した子もいれば、そうでなかった子も……。せりふを忘れて黙り込みながら、次の言葉を懸命に探す。頑張れ、と無言の声援を送りながら見守る観客の一体感が心地よかった▲落語会を立ち上げたのは、佐世保出身の放送作家、海老原靖芳さん(62)。きっかけは2004年に同市で起きた小6女児同級生殺害事件だった。「大人にできることとは何か」。沈みがちな子どもたちを案じた友人に請われ、笑いを通じた応援を思いついた。あきらめず、しなやかに、たくましく。そんな願いも込めた活動は6年目▲事件からきょうで11年。記憶の風化がささやかかれ、昨年は新たな悲しみが地域を襲った。「お後」の世代をどう守り、何を伝えるか。すべての大人が握り締めたバトンの重みをかみ締める日だ。(俊)